熊本大学学術リポジトリ

俳句 ： 文苑

著者	紫溟吟社，龍翠，翠琴，子明，悠童，杜子，祝子，紫郎，秋星，一波，越呉坊，杭子，禾乃，万里，木爪作
雑誌名	龍南會雑誌
巻	１０８
ページ	４９-５１
発行年	1904-11-30
URL	http://hdl.handle.net/2298/5770

俳句

紫溟吟社

○秋晴

秋晴や櫓太鼓の鳴り渡る　龍翠
病居士の椽に爪切る秋日和　翠琴
秋晴や五湖に浮くなる船の數　子明
球磨川を下る其日や秋の晴　悠童
秋晴や運動會のときの聲　杜子
秋晴の足ひたし行く海邊あな　祝子
秋晴や淺間の煙遙ゐ也　龍翠
風和ぐや七里が濱の秋日和　翠琴
秋晴の我には久し詩の病　杜子
煙吐く山近々と秋の晴　悠童
草山に馬飼はむ哉秋日和　翠琴
目に遠き阿蘇の煙や秋の晴　子明

○柿

柿日記俳句をつくる人となり　祝子
山柿の夕日に照るやきわやかに　龍翠
法會ある寺に柿賣る嫗かな　子明
柿取つて坊やに呉れる杢右衛門　紫郎
柿落ちて轉さひしき庵あな　翠琴
梢高く殘る熟柿や雨の夕　悠童
豆柿や草に埋るゝ車井戸　紫郎
雲崩れ柿の實に映ゆる夕日哉　祝子
澁柿の役にも立たぬ我身哉　祝子
赤ゝと柿黄昏るゝ渡あな　翠琴

○秋の蚊

秋の蚊の硯の水に溺れ鳧　秋星
味噌小屋に折々秋の蚊のうなり　翠琴
秋の蚊の垣根に高きうなり哉　杜子
秋の蚊の毛脛にあひてためらひぬ　秋星
秋の蚊を打つに哀を思ひ鳧　子明
溝古りて秋の蚊弱し草赤し　翠琴
秋の蚊や雨となる夜を歌にうむ　紫郎

○砧

風強く砧亂るゝ山の里　悠童
砧うつ夜や三更の月明り　翠琴
砧うつてさて笑みて若き妻　杜子
秋の灯に砧の響く山家哉　覡子
月小に其音も細る遠砧　秋星
風が吹く砧の音のしどろもどろ　翠琴
山深く小村小村のひる砧　悠童
隣から不意に打出す砧かな　紫郎
水村の灯遙かに砧うつ　子明

○花野

花の野や月夜十字の路あすみ　一波
山近く花野の末に日の暮るゝ　越吳坊
白き鳥の南へ飛びぬ花野哉　杭子
山暮れて花野に鐘のわたる哉　翠琴
十月や花野に多き詩の思　龍翠

○虫の聲

虫の聲下駄かへられて來る夜哉　越吳坊
古井戸や地虫なく音いと深し　禾乃
渡守る焚火は更けて虫の聲　翠琴
人を待つ橋の袂や虫の聲　仝
町なかの石の置場や虫の聲　杭子

○石（秋季結）

秋日和漬石洗ふくさみ哉　越吳坊
水あかの黃イろき石や下り鮎　杭子

○鷄頭

薄日さして傘干す庭や葉鷄頭　杭子
雨に立つ鷄頭つくねんと黃昏るゝ　翠琴

○木犀

木犀やどぶ板通る星明り　杭子
薄暗き路次木犀の香り哉　万里
木犀や小庭に寂し秋の雨　龍翠

○柳散る

假名文字のゆかしき橋や柳散る　越吳坊

○野分

野分して苔はがれたり上り船　木瓜作

遠くゐは提灯火事の野分哉　杭子

杭の間水のもめ合ふ野分哉　越吳坊

院は今比叡詣に野分かな　一波

武藏野や野分の跡に二十日月　翠琴

獨上高樓望八都　黑雲散盡月輪孤

茫々宇宙人無數　幾個男子是丈夫

（呂洞賓）